

長野県学びの県づくりフォーラムVol.05 × 地方創生フォーラム in 長野

一緒に考えてみませんか？ これからの地域の暮らしと学び合い

人口減少やテクノロジーの急速な発展など、変化が激しく先を見通すことが難しいこれからの時代においても、私たちが地域で心豊かに暮らし続けていくために、どんなことができるでしょうか。学びの県づくりフォーラム第5回となる今回は、(一財)地域活性化センターとの共同で開催されました。当日は、多くの方々がホテルメルパルク長野に集い、池上彰さんと登壇者それぞれの体験を踏まえた「学びと自治」の話に耳を傾けました。



基調講演「池上彰さん」
「学ぶ喜び」

子どもたちに教えた
学びは、将来とても役に立つ

池上 私はジャーナリストとしての活動の傍ら、信州大学を含む9つの大学で教えていて、テレビでは芸能人を相手にわかりやすく時事ニュースの解説をしています。でも、子どもの頃から勉強が好きだったわけではないんです。「なんで勉強しなきゃいけないんだ」って母親に聞いたら、「大人になったらわかるわよ」と言われました。全然答えになってないと思いましたが、でもそうなんですよね。大人になってみると、本当に勉強って必要なんだなってわかるんです。私の場合は、一生懸命勉強するようになったのは、大学を出てからです。学生時代にあまり勉強してこなかったという反省から、社会に出て仕事の合間に勉強することをずっとやってきました。そして子どもたちに、今勉強していると将来これがとても役に立つんだよということ、大人の立場でわかりやすく説明していかなければならないと思うようになりました。私が教える立場としての役割を

意識したのは、還暦を迎えた頃で

した。人生60年を過ぎて、社会に

何か恩返しができないかなと考える

ようになったのです。そんな時、東

日本大震災と東京電力福島第一原

子力発電所の事故が起きました。

「放射能が漏れている」「放射性物

質が飛散している」という噂が流

れて、みんな不安になってテレビ

の前に釘付けになりました。そう

して専門家の話を真剣に聞いてい

ると、ベクレルとかシーベルトと

か、これがまあ、何を言っている

のか全然わからない。特に文系の

皆さんには理系の専門家が言っ

ていることがわからないという状況

に陥ってしまった。人間、何が何

だかよくわからないという時が、一

番不安を感じるものなんです。

考えて見ると、日本は本当に文系

と理系にはつきり分かれてしまっ

て、両者の交流がない。文系と理

系を橋渡しするような、そんな役

割が必要じゃないか。そう

思っていたところに、東京工業大

学で教えてくれないかと依頼がき

たのです。

ニユースを社会的観点で見ると

歴史的な背景が見えてくる

東工大は極めて優秀な理系の学

生が集まる大学ではありますが、

文系、理系を問わず 幅広い教養で 社会の出来事を 多角的に理解する。

どうも学生の社会的視野が狭い、
社会に対する関心が乏しいという
ことで、文理を問わない幅広い教
養「リベラルアーツ」を身につけ
る教育に力を入れていました。こ
の文理融合が、本当に大事だと
思うことがよくあります。

たとえば、中国の武漢市を中心
に、世界に広まっている新型コロナ
ナウィルス。感染拡大を受けて、
その対策、予防、そしていつ収束
に向かうのか不安が広がっていま
す。でも、新型の肺炎だ、怖いな
というだけでなく、こういう出来
事から私たちはいろいろなことを
学ぶことができるわけです。

新型コロナナウィルスは、最初の
頃は患者数も少なく大したリスク
はないと思われていました。しか
しこれは、中国政府の多くの官僚
がトップの指示待ちをしていて、

次に新型コロナウィルスを理系
の立場から見えていきましょう。今
回のウィルスは、コロナウィルスの
新種です。ウィルスに関する理系
の知識を持っていると、ただ心配
で怯えることはなくなってきました。

**ウィルスが引き起こした
社会的な出来事**

ウィルスが突然変異して爆発的
に広がることを「アウトブレイク」
または「パンデミック」といいま
す。アウトブレイク（パンデミッ
ク）によって社会が大きく変わっ
たということが実は過去にもあり
ました。1918年から19年にか
けて、世界中に大きな犠牲者を出
したスペイン風邪がそれです。ス
ペイン風邪と呼ばれていますが、
これはインフルエンザだということ
がわかっていません。世界中で5億
人が感染し、5000万人から1
億人の死者が出たといわれています。
す。ちょうどこの時、第一次世界
大戦が繰り広げられていました。
大きな兵舎や船の中で団体生活を
送るうちに、スペイン風邪によっ
て兵士がバタバタと倒れていきま
した。とても戦うことができない
ような状況に陥り、結果的に第一
次世界大戦が終結する大きなきっ
かけになったということが現在で



池上 彰 ジャーナリスト

松本市生まれ。3歳まで暮らし、その後東京へ。毎年夏は松本の母親の実家に里帰りしていた。1973年、NHKに記者として入局。1994年から2005年まで「週刊こどもニュース」の「お父さん。」。2005年に独立。2010年、信州大学経済学部特任教授に就任。以後、毎年夏に「現代史」をテーマにした集中講義を行っている。2012年、東京工業大学リベラルアーツセンター教授就任。2019年、信州大学名誉博士。現在は、同大学など9つの大学で教える。著書に『学び続ける力』、『伝える力』、『おとなの教養』ほか多数。

はわかっていません。ウィルスが戦
争を終わらせてしまうような、そ
んな大きな力を持っているんだと
いうことが、これでわかるわけ
ですね。

ウィルスは寒いところだと活動
が活発になります。暑くなると、
活動が不活性化します。コロナウ
ィルスもそうですけど、インフルエ
ンザになると熱が出るでしょう。
あれは、人間が自分を守るために
あえて高い熱を出して不活性化し
ている。ウィルスが何も活動でき
ないようには防衛反応として熱が出

るんです。こういう科学的な知識を持つていただけで、ただ不安に怯えるのではなく、冷静に対処できるわけです。そしてまた、歴史的に見ると、ウィルスが広がることによって人間社会に大きな影響を与えるんだということもまたわかるわけです。

アウトプットを意識してインプットする

様々なニュースを見て、これは一体どんな意味があるのかってことを知ると、そこからまた学習意

学べば学ぶほど、 自分はもの知らない ということを知る。 それが喜び。

欲が生まれてきますね。私がNHKで「こどもニュース」をやっている時、子どもたちに教えてあげようというインフルエンザのことを猛烈に勉強したことがあ

りました。「インプット」と「アウトプット」という言葉があります。インプットは、自分で学ぶことです。様々なことを自分で学ぶ、自分の中に取り込む、これがインプット。アウトプットは、そういう知識を外に出していくことです。

とをよく理解したとします。けれど、それを人に説明しようとする時、うまく説明できないことがあります。そんな時は、誰かに伝えなければならぬという問題意識を持って取り組めば変わってくるはず。アウトプットを意識してインプットをすると、スムーズに入ってくる。つまり人に教えることは、実は自分にとっての一番の学びになるといえるんですね。

知らないことを知ればさらに知りたくなる

生涯にわたって学べば学ぶほど、自分はもの知らないということを知ることがあります。有名な言葉がありますね。「無知の知」。私の好きな言葉です。自分はもの知らないということを知ると、それによって新たなことを知りたいと思うようになる。これが、喜びなんです。皆さんもご存知の瀬戸内寂聴さんは、好奇心のたまりて、何歳になっても若々しくて無邪気です。常に好奇心を持ち続けていると、若さを保つことができるわけです。表面的にはしわが増えたり、髪の毛が白くなったりしますが、精神においては人間は年を取ることはありません。常に新しいことを知りたい、そういう好奇心を持つていると、当たり前ですけど、自分が生まれ育ってきた地域はどういうところだろうか、と考えるようになる。長野県から出ていって、他の土地を知って、また長野県に戻ってきた人もいます。ほかを見た上で長野県に戻ると、長野県の良さが見えてくるわけです。そうすると、我が郷土はどういうところなんだろうかと、改めて勉強しよう、そういう意欲も湧いてくるのではないのでしょうか。

自分たちの地域の問題は自分たちで解決していく

池上 これからは、私がコーディネーターとして進行を務めさせていただきます。まず、現在の活動をなぜ始めることになったのか、ということからお聞かせください。

黒岩 信州新町は、昭和の大合併時には人口は1万3000人を超え、商店も140から150店舗ありました。しかし、過疎化が進み、商店街の後継者もなく、現在は人口4000人を切る状況です。コミュニティの力、町全体の活力も減退しつつあり、お葬式などの地域のセレモニーも市街地の葬祭場などでやるようになりました。その結果、お葬式にまつわる文化・伝統が失われ、消費も地域外に流出するようになりました。そんな中、地域のセレモニーは自分たちの手でやろうという機運が高まり、冠婚葬祭事業を手がける任意団体を、平成14年に仲間9人で立ち上げ、16年にNPO法人化しました。

【黒岩さん×櫻井さん×宮下さん×阿部知事】
パネルディスカッション
これからの地域の暮らしと学び合い
コーディネーター 池上 彰さん



黒岩 伸雄さん NPO法人ふるさと理事長
長野県信州新町(現長野市信州新町)生まれ。地元商店街の衣料品店主。人口減少や高齢化の進行によって地域の文化や伝統、商店街の活気が失われつつある状況を前に、仲間と意見を出し合い、2004年NPO法人ふるさとを設立。「地域の事は地域が支える」を合言葉に、年間200件を超える冠婚葬祭事業や月間300食の高齢者配食サービスを展開し、持続可能な地域づくりに取り組む。



櫻井 記子さん

豊殿ふれあいサロン「hinata bocco とよさと」運営委員
看護師として厚生連佐久総合病院などで勤務。2002年より上田市豊殿地区に設立された特別養護老人ホームで認知症ケアや人材育成に携わる。同施設長を経て、2017年から社会福祉法人ジェイエー長野会教育顧問。特養設立当初より、住民主体の「安心」の地域づくりセミナーの企画運営等に参画。現在は、同地区で2018年にオープンした地域サロン「hinata bocco とよさと」を中心に、住民と多様な関係機関が協働し、安心して暮らせる地域づくり活動を継続。

宮下 祐介さん

若者コミュニティ Bridge 広報宣伝部長
1986年長野県安曇村(現松本市安曇)生まれ。地元中学校を卒業し、高校留学でニュージーランドへ。帰国後から7年間、東京で高級会員制フィットネスクラブのフロントスタッフやタクシー運転手などを経験。29歳の時、乗鞍高原へ帰郷。家族経営のパウムクーヘン店を手伝う傍ら、地域内外との交流や世代を超えた地域課題への取り組みを積極的に行う。地元小中学校卒業生で結成した若者コミュニティ Bridgeの広報宣伝部長として活動。



私たちの特徴は、一般の会社でいう部長や課長というようなものがなく、絶えず責任者が変わるというものです。最初に注文を受けたものが料理の手配から精算まで、責任者となります。メンバーは異なる業種から集まっていますが、みんなで考え、みんなでやっているというところで、最近では高齢者向けの宅配サービスなど幅広く展開しているところです。

地域ごとに16の住民組織があり、日常的に高齢者の困りごとなどを相談できる受け皿ができています。20年前、医療や福祉関連の施設を誘致しようと16組織を統合して活動を始め、認知症や福祉の学び合いの場として「安心の地域づくりセミナー」が開講されました。内容は医療・介護・福祉・健康・食・認知症など多岐にわたり、自分たちの手による「安心して暮らせる地域づくり」を目指し、医療や福祉問題を学び合い理解を深める場となっています。

2018年には、JAの空き店舗を有効活用し、支え合い助け合う地域づくりの拠点となるふれあいサロン「hinata bocco とよさと」を開設しました。50歳代から80歳代まで広範な人々がボランティアとして日替わりで活動を支えています。単に支えるだけではなく、認知症の当事者となった時の備えについて学び合う、一歩先ゆく高齢者、認知症の方から学び合うというような、そんな場所になっています。

私の所属するBridgeでは、コミュニティの交流を深め、全ての世代をつなげ、Passion(情熱)がある同志を集め、アルプス山岳郷に住む人々を結ぶ橋「Bridge」になるというのが活動理念になります。常々感じていることですが、住んでいる住民が楽しいと思えない地域に若者は帰ってこないと思います。そこで地元が純粋に楽しむお祭りとして毎年9月に「お月見会」を開催しています。昨年は約300人の地元の方が集まりました。また、インターネット上で「Alpass」というホームページを運営するなど、地域住民主体の情報発信に取り組んでいます。地域づくりをする上で、若者の参加が少なかったり、協力するのは難しいと考えがちですが、地域の人々は全て平等であるという原則のもと、横並びで学んで(Learn)、成長し(Grow)、そして共有する(Share)ことが大事だと考えて、不定期で意見交換会を開催しています。この「Learn・Grow・Share」を意識して実践すれば、若者が自発的に動き出すはずです。地域の一人一人が、自分が主役だと気づける環境づくりこそが大切であり、必要だと思っています。



池上 阿部知事、今の皆さんの報告を聞いてご感想はいかがですか。阿部 皆さんに共通しているのは、自分たちの地域の問題は自分たちで解決していくという姿勢です。黒岩さんのお話では、地域の慣習に基づいたセレモニーをされているということ、世の中がどんどん画一化される中でしきたりや文化、伝統を大切にしていきたいというのは大事なことだと思います。櫻井さんのhinata boccoは、まさに住民自治のあるべき姿だなと感じています。特に住民が語り合っているところが強みにつながっているんじゃないかと思っています。よそでも研修会や講習会を企画するわけですが、なんとなくその時だけ集まって、わかったような気になって、でも実は何も変わらない

ということが多いものですが、豊殿地区の皆さんはほとんど具体的な活動をされていて、レベルが違う取り組みをされているなど感じています。

宮下さんのお話から一番感じたのは、地域は皆平等ということですね。やはり平等に対話していかねば、たぶん発展はしていかない。みんなが平等というのは、これからの重要なキーワードになるんじゃないかと思っています。

まずは学び、気づきからスタートする

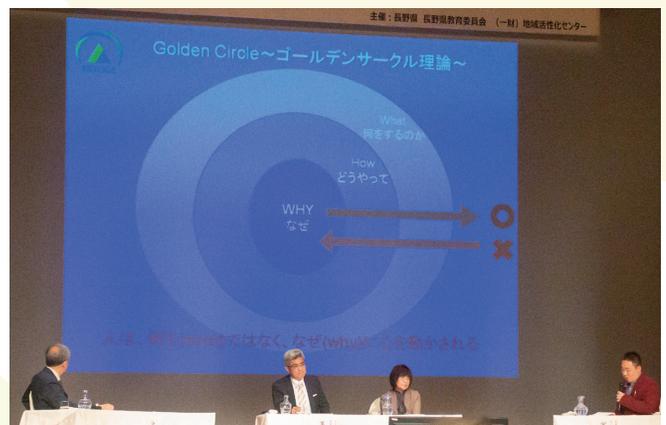
池上 櫻井さん、地域活動って最初は熱意を持って一生懸命に取り組むんですけど、段々尻すぼみになる傾向がありますよね。長く続ける秘訣は、なんででしょうか。

櫻井 地域に特別養護老人ホームをつくるという運動が起きた時に、相談に乗っていただいた大学の先生に、「箱物を造って万歳ではダメ。住民同士の学びが必要ですよ」と言われて皆で地域づくりセミナーを開催しました。また、先生には、「自分が変わらなければ、学んだことにはならない」「実践しなければ学びとはいえない」と言われたことがありました。いろいろな主義主張を持った人がいるけれども、お

互い意見も言い合って多様性を受け入れて学び合いながら仲間づくりをする。それが大事だと思えます。昨今の自治会って、役員が1年、2年やったら次の人に交代して継続性がないんですね。でも、マンネリ化しても10年、20年とやってみないと結果は出てこないと思います。それとボランティアの皆さんはほとんどが公民館活動の経験者なんです。長野県は、公民館の数が日本一ですよ。そういった地域資源をお互いに大事にしながら、風通しの良い地域にしていくことが大事だと思います。

阿部 Hinata bocco は、市とも県とも連携はなく、よく独立してこまめやっていらっしやるなどというのが私の最初の感想でした。地域の皆さんが実に率直に語り合っていて、同じ立場、同じ目線で取り組まれている。これは、行政が余計なことをしないほうが良いことがたくさんあると思いました。行政が画一的な絵を描いて、補助金を出しますよという、途端に魂が抜けてしまう。まずは、学び、気づきがスタートなのかなと思っています。

池上 実は東日本大震災で大きな被害を受けた市があるんですが、住民の皆さんが復興のためにすこ



く頑張っておられる。なんでそこまでやるんですかと聞いたら、市長が何もやってくれないからです。自分たちがやるしかないとな

り、結果的に活性化したっていうんです。なるほどなと納得しました。みんながどんどん自主的にやって、その後からついてお手伝いをするという、そういう行政の役割もまたあるのかなと思いました。次に、黒岩さんにお聞きしたいんですが、民間に依頼していた冠婚葬祭を自分たちの手で執り行いたいということでは今の事業を始められています。どんな思いで展開さ

れていますか。

黒岩 かつては私達も自営業で採算が取れて、生活もできていたんですが、今は二足、三足のわらじを履かなくちゃいけない時代になりました。冠婚葬祭事業では仕出しや引き出物、花などを扱う店を入れて、なんとか個人経営の店が商いを続けられるような展開をしています。人口が減ると、不便なことがいっぱい出てくるんですが、その不便なことをどうやって不便でなくするか、そういうことをみんなで悩みながらも考えてやっています。

池上 それって、そもそもそのビジネスの原点ですね。つまり、これが不便だからなんとかしよう。誰もやってくれないから、自分たちでやろうと。いろいろな起業って、そういう形で始まっていますね。さて、宮下さん、若者の割合が減ってきている地域が多い中、若い人たちが集まって、そこで活動を通しようとした場合、ご自身の経験を通じて、アドバイスなどありますか。

宮下 サイモン・シネックさんというコンサルタントが提唱しているゴールデンサークルという理論

を学びました。中心に「WHY・なぜ」というサークルがあり、その周りに「HOW・どうやって」、一番外側に何をするかという「WHAT」があります。「WHY・HOW・WHAT」という、3つのことを中心に捉えて活動しようという考え方をしています。活動を始めようとした時、日本人は、どうしてもまず、「WHAT・何をするか」から考えがちなんですけれども、これは一番だめで、成功する物事というのは、全て「WHY・なぜ」から始まるというのです。要するに人々は「何を」するかではなく、「なぜ」それをやるのかという理念にこそ心を動かされるからだと思います。あのアップル社の考え方も同じで、「世界を変える」という信念から始まっています。我々Boccosもこれに準じて、ゴールデンサークルの「WHY」の部分を常に探していくことを活動の軸にしています。

地域づくり、居場所づくりには明確な目標が必要

池上 阿部知事、公民館というのは、戦後、民主主義を支える地域の拠点として誕生してきました。今は全国を見るとかなり数が減っ

ているようなんですけど。今の櫻井さんのお話を聞くと、公民館活動が地域づくりや地域の維持に役立っているんだと改めて感じます。

阿部 そうですね。長野県は公民館活動が非常に活発な県です。あの意味、長野県の地域力の基盤、源泉になっているように思います。

それともう一つは、一人多役。長野県では昔から、たとえば夏は農業をやりながら、冬はスキー場のインストラクターを務めるなど、兼業で暮らしを担ってきた歴史があります。そういう一人多役の視



「主体的に」

「つながりながら」

「楽しく」

「全てのベースに 「学び」がある。」

点が、これからは大事なんじゃないかと思っています。

池上 ありがとうございます。それでは、最後に皆さんに今日のご感想と、それぞれの

お話を聞いた上で出てきた課題などがありましたら、ぜひお聞かせください。

黒岩 知事がおっしゃるように、長野県は昔から夏は農業をやって冬は建設現場へ働きに行くなど、一人多役で生きてきました。人がいないからとか、田舎には何も無いからとか後ろ向きになるんじゃないかと、若い人も若きもみんな学び合い、地域のことを考えていきたいと思います。

櫻井 私達の地域でも、地

域特性や自分

たちの持つて

いる強み、そ

して将来の可

能性など、そ

ういうことに

挑戦してい

なきやいけ

いんだなど

うことがわ

りました。宮

下さんのお話

を聞くと、情報発信力では若い人

にはかなわないなと思いましたが

れど、新しい若い力を生かして地

域づくりができたらいいなと思

いました。

宮下 今回、改めて仲間づくりが

大切だということを感じました。

池上さんから、大人になって学ぶ

楽しさがわかるというお話があり

ましたが、私も学ぶことによって

自分が成長しているのを感じられ

た時はすごく楽しいので、それで

終わらせるのではなく、次代を担

う人たちと共有しながら取り組ん

でいきたいと思っています。

阿部 幾つかキーワードがあつて、

一つは「主体性」かな。自分の

事として自分で行動することが重

要です。ただ、これは一人ではできないので、いろんな人たちとつながりを持つ。この「つながり」っていうのもキーワードだと思えます。そして、「楽しむ」ということ。「主体的に」「つながりながら」「楽しく」っていうのが重要じゃないかと思えます。実は、この全てに「学び」が結びついていて、みんなじゃないかと思えました。学ばなければ、自分はどういう立場で何をすればいいのかわかりません。学ぶことを通じて、誰かとつながっているのも見えてきます。さらに学ぶことは楽しい。全てのベースに「学び」があるといます。

池上 人口がどんどん減少して、過疎化していく、不便になっていく。やむにやまれぬ思いがあるからこそ、切羽詰まって新しい発想や新しい行動が生まれてくるんだなと実感いたしました。要するに、居場所づくりですね。居場所があれば人がとどまる、あるいは人がやってきます。そこにいけば居心地が良いんだよということがわかれば、地域は発展しますし、活性化につながるのではないでしょう



過去のフォーラムの開催録が県HPにアップされています。ぜひご覧ください！

か。地域づくり、居場所づくりで大事なことは、明確な目標を掲げるということですね。みんなが賛同できるような明確な目標に向かって進んでいく。そうすれば地域は、まだまだ良くなるんだよと。そういうことを教えていただけた。ここに大きな学びがあったなと思つています。今日は皆さん、ありがとうございました。



左から、椎川忍地域活性化センター理事長、池上さん、黒岩さん、櫻井さん、宮下さん、阿部守一長野県知事